

源氏物語別本の性格

——待遇表現から見た——

中村 一夫

一

近年見直しの兆しがおおいにうかがわれる源氏物語の本文の中で、ほとんど系統立てて論じられてこなかった別本のそれはどういふものであるのかを、待遇表現から調査してその性格および各本の相対的な関係を論じてみたい。ただしここで優劣というのは、表現技法上優れているか、否かというものではない。主に、より平安時代の物言いらしい伝本はどれかということ、日本語史および待遇表現史に照し合せて考察を進めていこうとするのである。調査の対象は『源氏物語別本集成』（一九八九年）の第一巻、第二巻に収められている桐壺から花宴までの八帖とする。

取り扱った伝本は次のものである。略号とともに記す。

大	古代学協会蔵	源氏物語	大島本
尾	名古屋市蓬左文庫蔵	源氏物語	尾州家本
陽	陽明文庫蔵	源氏物語	
麦	天理図書館蔵	源氏物語	麦生本
阿	天理図書館蔵	源氏物語	阿里莫本
御	東山御文庫蔵	源氏物語	御物本
国	天理図書館蔵	源氏物語	国冬本
中	中山輔親氏蔵	源氏物語	中山本

いわゆる青表紙本、河内本がそれぞれ一本ずつ、そして別本が六本である。桐壺から花宴まで一帖も欠けていないのは、大島本、尾州家本、阿里莫本である。陽明文庫本は紅葉賀、花宴が青表紙本系のためこれを欠き、麦生本は帚木、末摘花を欠いている。残る三本のうち、御物本は桐壺・帚木・末摘花・花宴の四帖が、国冬本は桐壺・帚木の二帖が、中山本は若紫のみがそれぞれ別本として取り上げられている。なお各伝本は複雑な過程を経て五十四帖（もしくはそれに近い数）の一揃えの組となっているため、各本の本文を論じるのは本来巻ごとに行なうべきものであろうが、ここではとりあえず包括的な性格を見ようと考へ、まず八帖を一まとまりのものと考へ論じる。さらに最後に巻ごとの諸本の比較を試みることにする。

二

源氏物語の敬語を日本語史の観点からとらえて本文の優劣を論じたものとして、つとに根来司の「源氏物語青表

紙本と河内本」(『平安女流文学の文章の研究 続編』一九七三年、所収)があった。根来は大島本と尾州家本の主に「たまふ」や「おほす」などの尊敬語を調査し、河内本の方が青表紙本より鎌倉時代の文語における用法に近いことを指摘して、さらに

わたくしの調査によれば青表紙本と河内本との本文のいちじるしい異同の一つは敬語にあると判断せられ、河内本のそれは平安中期の敬語が理解しにくくなった時代に、理解しやすく改めたのではないかと考えられる

と述べた。これは別本の本文を考える上でもまったく同様であると考えられる。別本の本文の待遇表現と青表紙本、河内本のそれを比べると、いちじるしい異同を目にすることができるといえる。別本の中には青表紙本、河内本成立以前の古い形を保っているものもあるであろうし、逆にそれらと混成することであらたな本文を生じてしまったものも当然あるだろう。さらに後世の人のさかしらによる改竄もあるはずである。根来の結論に導かれながら別本の待遇表現を調査・分類し、諸本の性格や相対的な位置関係などを見ていく。

さて待遇表現に着目し各本を読んでいくと、最も鎌倉時代の物言いらしいものとして、「おほしたまふ」「つかはしたまふ」のようなものが目につく。この尊敬動詞に尊敬の補助動詞のついた形は、平安時代中期には行なわれていなかったものである。^{注二}なぜなら尊敬動詞はそれだけで充分に敬意を表すものとして認識されており、それ以上の待遇表現をつけることは過剰以外の何者でもなかったからである。既に先学によつて指摘されているように、一語で充分な待遇意識を持つ尊敬動詞は一般動詞に「たまふ」がついた形のものよりも待遇度の高い表現であった。たとえば「おほす」と「思ひたまふ」では「おほす」が、「ごらんず」と「見たまふ」では「ごらんず」が、それぞれ敬意の高い表現として使われていたときである。つまり両方の表現の間には明確に待遇意識の差が存在しており、それを混同するような表現はわずかの例外を除き使われることはなかった。しかし、鎌倉時代になってくる

と、この尊敬動詞に「たまふ」がつくかたちが見えてくるのである。先の根来の論によると、海人の刈藻や小夜衣といった後世の擬古物語にこうした待遇表現を数多く確認することができるという。これは鎌倉時代以後は平安時代の微妙な待遇表現がよくわからなくなってきたため、なんでも「たまふ」をつければ待遇度が高くなるという誤った認識ができた。その結果、平安時代中期の語法にそぐわないものが現れてくるとされるのである。

それでは源氏物語の青表紙本、河内本、別本の各本文には、この鎌倉時代を特徴づける待遇表現がどのくらい出ているのか。まず例をいくつかあげることにする。なお本文は大島本を底本として掲げ、該当部分に傍線部を付した。その後に各伝本の校異を略号とともに併記する。また補入やミセケチなどがある場合は、原則としてそれによって訂正された本文を取った。問題のある場合はその都度言及する。以下すべて同じである。

あけくれまつはしならはし給ければこよひもまつめしいてたり（帚木）

陽「めしいてたり」 阿・御「めしいて給へり」

国「よひいてたまへり」 尾「めしいてたまへり」

まず「めす」に尊敬の補助動詞「たまふ」がついている例である。これは源氏が空蟬の弟である小君を自分の所に呼びつけるくだりである。「めす」だけでこは充分敬意が表されているのに、尊敬動詞に「たまふ」をつける阿里莫本、御物本、尾州家本の表現は過剰な待遇表現であると考えられる。

なにかさらにおもほしものせさせ給（夕顔）

陽「おほしめさん」 麦・阿「おほし物せさせ給も」

尾「おもほしものせさせ給も」

夕顔のことで思い悩む源氏を惟光が叱咤するところである。『小学館日本古典文学全集源氏物語』の頭注には『思ほしものす』で一語。あれこれと考え込む敬語」とある。ところが、陽明本以外ではこの尊敬動詞にさらに尊敬の補助動詞「たまふ」が余分についている。ここは乳母子の惟光が源氏に対して過剰の待遇意識をもつて接しているとするのがよいのだろうか。しかし、この前後の二人の会話をみると、惟光は源氏に対して一つだけ待遇表現を用いるものが多い。従ってここだけ過剰になっているのは解せない。やはり陽明本の表現がその場の生々しい会話を伝えているということができるのではないか。

さうしみのものはいはておほしうつもれ給らむさまおもひやり給ふも（末摘花）

陽・御「思ひうつもれ給らん」 阿「思うつもれ給はん」

尾「おもひうつもれたまふらん」

これは末摘花の所へ訪れなくなった源氏がかの家の命婦に責められて末摘花のことを思い出しているくだりである。大島本の独自異文は末摘花には過剰の待遇表現でふさわしくない。『源氏物語大成』を見ると、ここは青表紙本系の共通異文であることがわかる。この箇所は河内本、別本の方が穏当であろう。

今は三例を見ただけであるが、このように扱っている八つの諸本を対校した際に、どれかひとつの伝本でもこの過剰な敬語があれば拾い上げることになると、「きこしめす」「おほとものこもる」「めす」「ごらんす」「おぼす」などについて、全部で十九カ所が数えられる。これを語法に照して穏当なものとは不適当なものに分けていくと、表1のような結果が出る。なお麦生本、阿里莫本のその他は該当箇所が「ナシ」になっているものである。

さて問題にしているこれらの「おほしたまふ」や「つかはしたまふ」という表現が平安時代の普通の敬語表現で

なかったことは早く江戸時代の学者によって指摘されていた。

本居宣長は『玉あられ』の文の部の「つかはす」「つかはさる」の条で次のように言う。

此詞はたとひ貴人のうへにても、ただつかはしける、などいふ例なり、古き書共を見て知るべし、「つかはされける、或いは「つかはし給ふなどはいはむこと也、(大野晋編『本居宣長全集第五巻』一九七〇年、所収)

また藤井高尚は『消息文例』の上巻の「おぼす」のところで、

さて此詞、すなはちうやまひなれば、おほしたまふと、たまふをそふることはなし、(根来司解説『消息文例』一九七八年)

と述べていた。そして過剰な敬語が顕著に行なわれるようになったのは、鎌倉時代以降であるという。ただし尊敬動詞と「たまふ」の間に「せ」「させ」「れ」「られ」などの助動詞を介して両者がついている時は許容されていたようである。

尊敬動詞や「たまふ」などの使い方を子細に検討してみなければ容易に結論づけることはできないが、表1を一見して明らかのように、青表紙本系の大島本と別本の陽明本が比較した中では平安時代の語法にはずれない穏当な形のものを多くもっている。逆に河内本系の尾州家本は不適当なものが多く見えている。また別本の麦生本、阿里

表1 過剰な待遇表現

	穏 当	不穏当	その他
大島	11	8	
尾州	9	10	
陽明	11	8	
麦生	6	6	1
阿里莫	7	11	1
御物	5	4	
国冬	3	2	
中山	1	1	

莫本の結果もよくない。特に阿里莫本の結果が思わしくないが、麦生本と阿里莫本の親近関係^{注二}を考えに入れると、帚木と末摘花を欠く麦生本もすべてが揃っているならば、同様の結果を見ることになると思われる。根来は先の論考で、鎌倉時代には待遇表現をそろえようとしたために「おぼす」や「たまふ」が安易に行なわれ、その結果過剰な待遇表現が増えてきたことを指摘していたが、それを敷衍して考えるならば、尾州家本や麦生本、阿里莫本などは鎌倉時代の待遇表現認識による校訂を受けている、もしくは校訂を受けた本文を伝えていると推察される。しかしながら、程度の差こそあれ、いずれの本にも後世の手が入っているのは確かなことであるから、本文の取り扱いに注意を要することはもちろんである。

ではここで別本の陽明本、麦生本、阿里莫本が、過剰な待遇表現の異同のある箇所で大島本と尾州家本のどちらに近いのかを探ってみる。表2にまとめたものを示す。こうした特殊な表現の異同状況を見ることによって、各本の相対的な距離をある程度探ることができると思われる。待遇表現は時間の変化を比較的受けやすいものであるから、その中にあつて鎌倉時代を特徴づけるような特殊な待遇表現が一致しているということは、両者になんらかの関係を予測させるであろう。なお表中の数値の後の括弧内の数字は表現の穏当なものの数を表している。たとえば陽明本が尾州家本に一致しているのは六例あり、そのうち四例が穏当な表現であることを示している。

この表から読み取れることは、まず陽明本、阿里莫本ともに尾州家本によく一致しているということである。しかし、陽明本が穏当な形で多く一致しているのに対し、阿里莫本がそうでないのは大きな違いである。

次に大島本と一致している時は、おおむねその待遇表現が平安時代中期の語法に照してみて

表2 過剰な待遇表現の異同箇所的一致状況

	大島と一致	尾州と一致	両者と一致	両者と相違
陽明	2 (2)	6 (4)	6 (2)	5 (3)
麦生	4 (3)	1 (0)	6 (3)	2 (0)
阿里莫	3 (2)	6 (2)	6 (3)	4 (0)

穏当であるということに気がつく。三本の合計九例のうち、不適当なものはわずかに二例なのに対して、尾州家本に一致している方は、合計十三例の内半数以上の七例が不適当なものである。これは尾州家本が鎌倉時代以降の待遇表現を多くもっていることの証査ともなるであろう。また麦生本と阿里莫本が大島本、尾州家本の両者に相違する時、いずれも不適当な形になっていることにも注意される。ここに限つていうならば、やはり青表紙本系の大島本に本文に關して規範性を見ることができないかと思われる。

こうして鎌倉時代にそれぞれの待遇表現のもつ敬意の軽重がわからなくなったため、平安時代の語法に照して不適当なものが現れてきたが、それらの痕跡は残されている伝本によつて違いがあることが見て取れた。

三

諸本の敬語の使用状況を見ていった時、先に述べたような過剰な待遇表現だけにとどまらず、「たまふ」の使用一般に大きな差を見出すことができる。早速例をあげることにする。

なに事そやわらはへとはらたち給へるかとてあまきみのみあけたるにすこしおほえたとところあれはこなめり
とみ給（若紫）

陽「みあけ給へる」 尾「うち見あけたまへる」

麦「うちみあけたる」 阿「うち見あけたる」

中「うちみあけ給へる」

陽「おほえ給へは」 尾「おほえたまへは」

麦・阿「おほえたる」 中「おほえ給へれば」

雀を犬君に逃された紫上の姿とそれをたしなめる尼君の姿を源氏が覗いているくだりである。大島本や麦生本、阿里莫本は最低限度の待遇表現を使っているだけに、尾州家本をはじめとして陽明本、中山本などはことあるごとに「たまふ」を使っている。明らかに冗漫な感じがしている。

さしもあるましき事なれとさすかにおかしうおもほされていつれならむとむねうちつふれて（花宴）

麦「うちつふれ給ひ」 阿「うちつふれ給」

尾「うちつふれたまふ」 御「うちつふれて」

いらへはせてたゝとき／＼うちなけくけはひするかたによりかゝりてき丁こしに手をとらへて（花宴）

麦・阿「とらへ給て」 尾「とらへたまて」

御「とらへて」

この二つの例は花宴の最後の所からである。ようやく意中の臘月夜を見つけた源氏の行動を追う文章にしては、尾州家本や麦生本、阿里莫本の表現はあまりに客観的で落ち着きすぎている。ここはやはり待遇表現抜きで一人の男と一人の女が対峙している様子を出している大島本の表現の方が、より臨場感を感じさせる。

桐壺巻から花宴巻まで一帖も欠けていない大島本、尾州家本、阿里莫本などでは約一六〇〇例「たまふ」が使用されているが、目につくのは尾州家本のそれである。別本の諸本が国冬本を除いていずれも大島本よりも使用数を減らしている中であって、尾州家本だけが大島本よりも多く「たまふ」を使用している。これはやはり特徴ある現象だといえることができる。これらの例を子細に見てゆくと尾州家本などの待遇表現にはやはり平安時代らしさとい

うものがなく、ただむやみに「たまふ」をつけていることを知ることができる。それは先の根来の論によると、校訂の際、待遇表現を揃えようと意図した結果のものとされていた。源氏物語の待遇表現を青表紙本で調査すると、そこにはひとしなみに待遇表現をしようとした形跡はなく、話法または話の展開、人物の相對關係などの複雑な要素を、うまく敬語に反映させて過不足のない体系を作り上げているのがわかる。つまり鎌倉時代以後のそれがやたらに待遇表現を使い過ぎ、生氣のないものになっているのに対し、平安時代中期では必要不可欠なものがそれこそ絞り込まれて使われていたのである。待遇表現があるものもないのもそれぞれしかるべき理由のもとにそうされていたのであって、けつして恣意的に揃えようなどとはしなかった。それゆえに不自然に揃った姿を見せる尾州家本のそれは、やはり後世の認識による校訂もしくは改竄を受けたものと見るほかはないであろう。ただしそれがいつ行なわれたものなのかは、別に考えるべき問題である。もちろん大島本が幻の原典に近いという保証もないのは言うまでもない。

別本諸本では国冬本を除いて、いずれも大島本より数を減らしている。それでも別本の中で比較的古態を保っているかとされている陽明本の総数はともかく、大島本に対する増加数と減少数が河内本系の尾州家本の動きとよく似ていることには注意される。既に諸氏によつて指摘されている両者の親近關係が想起させられよう。

では続いて主な尊敬動詞の使用状況を見る。まず「おほす」「おもほす」「おほさる」である。表の増加数、減少数はそれぞれ大島本を基準としての数である。つまり大島本になく他の本に「おほす」などが使われていると増加数の方に勘定し、その逆の場合は減少数の方に勘定している。以下すべて同じである。

故大納言のゆいこむあやまたす宮つかへのほいふかく物したりしよろこひはかひあるさまにとこそ思ひわたり
つれ（桐壺）

陽・阿・国「おもほしわたりつれ」

麦「おもひわたりつれ」 尾・御「おほしわたりつれ」

人のほともあてにおかしう中々のさかしら心なくうちかたらひて心のまゝにをしへおほしたて、みはやとおほす（若紫）

陽・尾・中「たて、」 麦・阿「おほしたて、」

桐壺の例は大島本が一般動詞の時に他の本が尊敬動詞になっているもの、若紫の例は他の本が一般動詞であるのに大島本が尊敬動詞になっているものである。これらをまとめたものが表3である。

各本とも大島本と比べてかなり増加していることがわかる。中でも尾州家本の突出には注意される。尾州家本が「おほす」を安易に使っていることは根来の先の論考に指摘があった。また別本諸本も尾州家本ほどではないものの、かなり大島本に比べてこれらのことばを使っていることに目が引かれる。特に陽明本の動きに気をつけたい。おおむね陽明本は待遇表現の異同に関して尾州家本に近い動きをしていることが多いのである。

なおここで指摘しておきたいのは麦生本と阿里莫本のみ諸本に比べ圧倒的に「おもほす」を用いていることである。いったい「おもほす」は「おほす」の古形であるが、前者は奈良時代から平安時代にかけて用いられ、鎌倉時代になるとしだいに姿を消していくものであった。そしてかわりに「おほす」が勢力を伸してきた。しかし、この麦生本と阿里莫本の現象は、両本が古い形を保っているというよりも、後世の書写者が恣意的に平安時代語らしくす

表3 「おほす」「おもほす」「おぼさる」の使用状況

	総数	増加数	減少数	差引
大島	449	*	*	*
尾州	491	67	25	42
陽明	405	59	32	27
麦生	360	24	14	10
阿里莫	474	47	22	25
御物	201	21	9	12
国冬	118	12	5	7
中山	106	25	10	15

るために揃えていったと考えたほうがむしろよさそうに思われる。夕顔、若紫以外の巻では少ない巻で全体数の六割、多い巻では九割もの高率で「おもほす」の方が使われており、他本と照し合せてもあまりにも揃い過ぎているからである。判を押したように「おもほす」で統一されている麦生本と阿里莫本のかえつてどこか不自然ですらある。またその「おもほす」と「おもほす」の使用状況は、麦生本と阿里莫本で九〇パーセント以上一致している。この特異な異同状況から両本に近しい関係があると判断してよいのではないだろうか。

続いて「のたまふ」の使用状況である。

としころ思ひわたるさまなといとよくの給つゝくれとましてちかき御いらへはたえてなし（末摘花）

陽・尾「いひつゝけたまへと」

御・阿「いひつゝけ給へと」

かのをはにかたらひ侍りてきこえさせむとすくよかにいひてものこわきさまし給へればわかき御心にはつかしくてえよくもきこえ給はす（若紫）

陽・尾・中「のたまはす」 麦・阿「聞え給はす」

こうした例を数え上げて表4にまとめた。

「のたまふ」は諸本とも大島本に比べて減少している。辻村敏樹の『敬語の史的研究』（一九六八年）に収められ

表4 「のたまふ」の使用状況

	総数	増加数	減少数	差引
大島	217	*	*	*
尾州	215	12	14	-2
陽明	191	14	17	-3
麦生	156	3	4	-1
阿里莫	216	9	10	-1
御物	78	2	5	-3
国冬	40	1	3	-2
中山	59	6	8	-2

ている「敬語変遷一覧表」を見ると、「のたまふ」は平安時代から鎌倉時代前期まで使われるが、室町時代になると使われなくなるとあり、同じく「のたまはす」も平安時代には使われていたが、鎌倉時代になると使われなくなるとある。諸本の使用総数から見て今の結果はこの変遷と直接関係するものではないと予想されるが、各本の書写者が「のたまふ」を理解しにくくなったためそれを使わず、より理解しやすい他の語（たとえば「言ひたまふ」など）に置き換えたのではないかという可能性はある。たとえば尾州家本では減少数の半数以上が「何々たまふ」の形に変わっているし、陽明本も同じく約五割が「何々たまふ」となっている。もつとも差といってもわずかに一例から三例なので、はっきりしたことは言いがたい。なお巻ごとでは、若紫において陽明本は尾州家本に、一方麦生本、阿里莫本は大島本に接近しており、また末摘花では大島本と御物本が、尾州家本と陽明本、阿里莫本がそれぞれ重なった表現を多く持っていた。

今度は「おはす」「おはします」の類である。

内におはするほとにてうへにそうし給ふ（花宴）

麦・阿「さふらひ給」 尾「さふらひたまふ」

御「をはする」

君もしゐて御心をおこして心のうちに仏をねんし給てまたとかくたすけ

られ給てなん二条院へかへり給ける（夕顔）

陽「をはしましつきにける」

尾「おはしましつきにける」

表5 「おはす」「おはします」の使用状況

	総数	増加数	減少数	差引
大島	153	*	*	*
尾州	162	21	12	9
陽明	143	24	11	13
麦生	124	10	5	5
阿里莫	157	9	5	4
御物	71	4	2	2
国冬	35	3	5	-2
中山	43	9	7	2

麦・阿「おはしましつきにけり」

前者は源氏が右大臣方の藤の宴に招かれたことを桐壺帝に報告するところである。「おはす」を使うと敬意の主は源氏になるが、「さふらひ給」だと桐壺帝の存在が強く意識される。後者は夕顔を鳥辺野へ葬った後の源氏の様子である。この異同は『源氏物語大成』を見ると、青表紙本系の独自異文であることがわかる。青表紙本系以外の諸本はすべて「おはします」が使われている。表5に数値を示す。「おはす」は平安時代から鎌倉時代に用いられ、一方「おはします」は平安時代を中心に使われたことばであるという。国冬本を除きいずれも大島本より増加しているが、ここでは陽明本が最も目立っている。

最後に「きこしめす」の使用状況を示す。これも先の「おはす」「おはします」と同様に大島本に比べた時、陽明本が最も多く増加している。

月のおもしろきによふくるまであそひをそし給ふなるとすさましう物
しときこしめす（桐壺）

陽「きかせたまふ」 麦・阿・御・国・尾「きこしめす」

桐壺更衣亡き後の清涼殿は沈みきった雰囲気であるが、ひとり弘徽殿だけは管弦の遊びに興じている。それに対して桐壺帝は心底味気ない思いをかみしめているというくだりである。この帝の行為を待遇するという点で、陽

表6 「きこしめす」の使用状況

	総数	増加数	減少数	差引
大島	15	*	*	*
尾州	16	2	1	1
陽明	16	4	2	2
麦生	14	3	0	3
阿里莫	16	2	1	1
御物	9	1	1	0
国冬	10	3	0	3
中山	4	1	0	1

明本の「きかせたまふ」より諸本の「きこしめす」という形の方が明らかに穏当であると思われる。表6に使用状況を示した。

四

ここまで各本に使われている尊敬語を数量的に見てきたが、本節ではさらに鎌倉時代人の待遇意識を踏まえて異同箇所を詳しく考察していく。先にも述べたように、平安時代中期の待遇表現には待遇意識の程度に差があった。同じ尊敬表現でも単独の尊敬動詞に比べて一般動詞に「たまふ」のついたものは敬意が軽かったのである。ところが時代が進むにつれて尊敬動詞と「一般動詞プラスたまふ」という形が同程度の待遇表現となってくる傾向があるという。そこで次に大島本を中心として、尊敬動詞の異同について、いかなる形の敬語になっているのかをまとめる。表7は大島本が尊敬動詞の時に他の諸本はいかなる形を取っているかをまとめたもの、表8がその反対で、諸本が尊敬動詞の時

表7 大島本が尊敬動詞の箇所の諸本のことは

	他の尊敬動詞	たまふ	一般・ナシ	合計
尾州	4	31	18	53
陽明	5	29	28	62
麦生	1	6	16	23
阿里莫	2	15	21	38
御物	0	8	9	17
国冬	1	6	6	13
中山	3	13	9	25

表8 諸本が尊敬動詞の時の大島本のことは

	他の尊敬動詞	たまふ	一般・ナシ	合計
尾州	4	42	56	102
陽明	4	42	53	99
麦生	1	13	26	40
阿里莫	1	24	43	68
御物	0	11	17	28
国冬	2	5	12	19
中山	3	16	22	41

に大島本がいかなる形を取っているかをまとめている。もちろん比較している両本の待遇表現が一致しているものはこの中から除外している。

尾州家本では大島本に比べて四九例も多く尊敬動詞を使用している。以下、陽明本は三七例、麦生本は一七例、阿里莫本は三〇例、御物本は一一例、国冬本は六例、中山本は一六例とそれぞれ大島本より数多く尊敬動詞を使っている。つまり尊敬動詞の類は青表紙本系の大島本よりも河内本や別本の方で圧倒的に多く使われているのである。安易に尊敬動詞を使っているとされた尾州家本だけでなく、別本の陽明本、麦生本、阿里莫本など主要な伝本も尊敬動詞を大島本よりかなり多く使用している。これはいったいどう受け取ればよいのであろうか。ひとしなみに尾州家本と同じく、後世の鈍くなった待遇意識によって安易に尊敬動詞が使われたと考えてもよいのであろうか。しかし、これはなかなか難しい問題である。例を見る。

心のまゝにとふらひまうつる事はなけれと猶さひしうたいめむせぬ時は心ほそくおもほゆるをさらぬわかれは
なくもかなとなんこまやかにかたらひ給て（夕顔）

陽・麦・阿「かたらひ給て」

尾「のたまひて」

これは源氏が病床の大貳の乳母を見舞った時の描写である。源氏の心を尽くしたことはをうけるものが、「かたらひたまふ」か「のたまふ」かで対立しているわけであるが、ここは「かたらひたまふ」の方がより親身になって話しかけていることが伝わってくると思われる。その点で尾州家本の表現だと、ただ単に源氏に対する敬意のみが感じられるだけで、二人の間の情といったものは伝わりにくい。こうした例であれば、比較的、文学的価値（古いとは限らない）を議論しやすいのであるが、ところが次のようにどちらともいえないものも、かなりの数存在して

いる。

ひるのおもかけ心にかゝりて恋しければこゝにものしたまふはたれにかたつねきこえまほしき夢をみ給へしか
なけふなむ思ひあはせつるときこえ給へは（若紫）

陽・中「をはするは」 尾「おはするは」

麦・阿「物し給は」

われにもあらずあらぬ世によみかへりたるやうにしはしはおほえ給ふ（夕顔）

陽・尾「おほさる」 麦・阿「おほす」

まず前者は北山に加療に來た源氏が偶然紫上を見い出す。その直後に僧都に彼女の素性を聞き、所望するくだりである。この「ものしたまふ」または「おはす」は、北山にいる人間を指して使っているわけであるが、源氏の立場からすると「おはす」は物々しすぎるようにも思えるし、また礼を尽くして「おはす」を使っているようにも取ることができる。つまり優劣の判定はつけがたいのである。

後者は物怪に取り殺された夕顔を東山に葬った後の源氏の様子である。「自分でないような気持ちがして、別世界に蘇ったようにしばらくはお思ひになる」というものであるが、これも「おほえたまふ」と「おはす」のどちらが優れているのか、決めることは難しい。

これらにとどまらず、まだまだこの種のもの数が多くある。無理に優劣の判定をしたところで、表現上優れているものが古い形であるかどうか定かではないし、なによりそれは恣意的な判定になる恐れが多分にある。そこでここは視点をかえて、大島本と尾州家本のどちらに別本の表現がより近いのかを見ることで、諸本の性質をうかがおうと思う。そしてここまではそれぞれの伝本の八帖をひとまとまりのものとして扱ってきたが、これは巻ごとに別

本の本文を調査する。表9は別本である陽明本、麦生本、阿里莫本が異同のある箇所、大島本と尾州家本のどちらに一致しているのかを調べたものである。一致率を百分率で示している。表の「両者」というのは大島本、尾州家本のどちらにも一致しているもので、「独自」というのは逆にそのどちらにも一致しないものである。「*」のマークは当該の巻を欠いていることを表わしている。

この表9は多くのことを語っている。桐壺では陽明本が大島本にも尾州家本にも近寄らない、すなわち独自の本文を全体の約四割と多く持っている。いったい陽明本は桐壺巻において他の諸本にまったくない待遇表現を多く持っており、たとえば著名な例である冒頭の「いつれの御時にか女御かういあまたさふらひ給ける中にいとやんことなき、はにはあらぬかすくれてときめきたまふおはしけり」などのような特徴ある待遇表現が頻出してゐた。麦生本と阿里莫本は大島本に近い。特に麦生本で異同箇所において尾州家本とのみ一致しているものが皆無であることには注意させられるが、これは書き入れの部分の影響が大きい。麦生本の桐壺では待遇表現の部分にも多くの書き入れがあった。また阿里莫本も尾州家本とは異質な本文であることが既に報告されて^{注五}いた。

表9 尊敬動詞の異同箇所の諸本一致率

		桐壺	帚木	空蟬	夕顔	若紫	末摘花	紅葉賀	花宴
陽明	大島	10.3	25.0	0.0	27.1	1.3	8.2	*	*
	尾州	20.5	5.0	33.3	27.1	70.9	73.5	*	*
	両者	28.2	35.0	22.2	14.6	25.3	10.2	*	*
	独自	41.0	35.0	44.4	31.3	2.5	8.2	*	*
麦生	大島	37.5	*	20.0	12.5	62.0	*	73.3	0.0
	尾州	0.0	*	20.0	31.3	5.1	*	0.0	90.9
	両者	57.5	*	30.0	25.0	24.1	*	6.7	9.1
	独自	5.0	*	30.0	31.3	8.9	*	20.0	0.0
阿里	大島	27.5	0.0	20.0	10.5	62.0	6.1	80.0	0.0
	尾州	10.0	35.0	20.0	31.3	6.3	71.4	0.0	90.9
	両者	55.0	60.0	30.0	25.0	21.5	10.2	6.7	0.0
	独自	7.5	5.0	30.0	33.3	10.1	12.2	13.3	9.1

帚木では陽明本は独自の本文と大島本に近い本文が混在し、阿里莫本は尾州家本とほぼ一致する。空蟬では異同箇所は少ないのであるが、三伝本がそれぞれ違う形を見せている。まず陽明本が尾州家本に近いながらも独自の表現を多く持っている。約四四パーセントの数字は桐壺以上であり、やはり多いといえる。阿里莫本と麦生本はどちらも近寄らない中間の位置を占めている。続く夕顔は麦生本、阿里莫本ともに一転して尾州家本に近く、陽明本はほぼ同じような割合で大島本と尾州家本、そして独自の表現が見える。

さて残る四帖であるが、これらはいずれもはつきりとしている。若紫は陽明本が尾州家本に極めて近い。それまでの四帖では比較的どちらかの本に近寄っているものの、かなりの割合で独自の表現を持っていたにもかかわらず、ここに来てにわかに尾州家本と接近している。九割以上の一致率から両者の本文が近い関係にあると考えざるを得ない。なお若紫では中山本も極めて尾州家本、陽明本と近い関係にあった。中山本は池田利夫や伊藤鉄也が指摘したように、河内本はもとより院政期の源氏釈や源氏物語絵巻の詞書の本文に近いものを持っている。大島本とは違う尾州家本や陽明本の敬語が、改めて重大な問題を投げかけてくるのであった。逆に麦生本と阿里莫本とは八割以上の一致率で大島本に接近している。陽明本とは対照的である。

末摘花では陽明本、阿里莫本ともに尾州家本に近い。紅葉賀では麦生本、阿里莫本両方ともまったく大島本といつてよいほど接近しており、花宴では逆に両者ともほとんど尾州家本といえるほどの結果となっている。両巻ともに大島本か尾州家本に偏った時には、もう一方の本にまったく近寄っていないことに注意されよう。これは元々あった本文に青表紙本または河内本のどちらかが接触したという可能性の高いことを示しているであろう。

こうした結果から次のようなことが考えられる。まず麦生本と阿里莫本は、池田亀鑑のいう「第二類河内本成立以後の混成本文を有する伝本」であると予想される。というのは巻によって差はあるものの、第一類古伝本と考えるには、あまりにも青表紙本または河内本に使われている待遇表現の色が濃いからである。さらに平安時代中期の語法にはずれるものも多く持っていたことも思い合わせられる。また待遇表現に関して平安時代中期の語法からは

ずれるものが多いとされた尾州家本であるが、それは単独で独自に改変されたのではなく、池田亀鑑のいう「第一類古伝本系別本」（たとえば陽明本）に既にその痕跡が見つけられる。これは源光行・親行らの校訂方針にも深くかわる問題であろう。この調査の結果は、河内本を作るに当って彼らはみだりに本文を改めていったのではないとする説に符合しているといえる。つまり平安中期の待遇表現の体系にそわないものは、河内本が成立する以前に既に現れていたことになるであろう。

一方それらとは異なる大島本（青表紙本）の位置付けを考える時、阿部秋生のいうように青表紙本も別本のひとつだと判断すれば、待遇表現の面では明確に差があるのであるから、どちらがより古態を有するのかがということが興味深い点になるであろう。^{注七}

さらに付け加えて、従来源氏物語の方法のひとつとして論じられてきた待遇表現の使用法も、実は青表紙本系源氏物語のそれであつて、すべての諸本に当てはまるわけではないことを忘れてはならない。

五

総じていえば、陽明本の本文は尾州家本に近く、麦生本と阿里莫本は大島本に近いといえそうであるが、それはあくまで相対的なものである。たとえば一部の巻において麦生本や阿里莫本が尾州家本に極めて近似しているように、つまりは巻ごとにはなほだしい差があるのであつた。これらの結果を見るだけでも、別本とされる各本の本文がいかに錯綜しているかが容易にうかがえるであろう。さらに一揃えの伝本であつても、それが揃う過程において種々の原因から、多くの系統の本文が入り交じり、結果として錯綜した本文を持つ五十四帖となっていることを忘れてはならない。つまり各本の本文を考える時には、巻ごとの考察が欠かせないということになる。これは何も別本だけに限った問題ではない。これまで研究の中心であつた青表紙本系や河内本系の諸本の本文も、原則として巻

ごとの検討が必要なことを示唆している。

それにしても源氏物語の本文の中でよしとされてきた青表紙本系の大島本の本文が、書写年代の古い別本のそれとは離れていることが多く、逆に河内本系の尾州家本に別本が近づいているのは非常に興味深いところである。意の尽くさない点が多く残されてしまったが、さらなる考察は今後の課題である。

注一 たたとえば辻村敏樹編『講座国語史 第五巻 敬語史』（一九七一年）所収の森野宗明「古代の敬語Ⅱ」には次のようにある。

敬語動詞には、同種の待遇的価値をになう助動詞・補助動詞が加重されることはまれである。尊敬、謙譲の別なく齊一にそうである。（中略）加重は、不必要、さらには過剰として避けられる傾向があったのである。加重が顕著になるのは鎌倉時代以降であるといわれるが、（中略）和文系の作品に、加重表現としての「御覽ぜらる」とおぼしき例が、わずかながらみられるようになるのも一世紀後半あたりからである。

注二 池田亀鑑『源氏物語大成研究篇』（一九八五年）に指摘がある。

注三 玉上琢弥「敬語の文学的考察——源氏物語の本性（その二）——」（『源氏物語研究』一九六六年、所収）や秋山虔「源氏物語の敬語」（『王朝の文学空間』一九八四年、所収）など。

注四 先に引用した根来司論文。

注五 吉岡曠は「河内本『桐壺』巻の校訂過程（上）（下）」（『文学』一九八四年一月、二月）において、麦生本の本文を尾州家本の修訂の際の基幹本文と推定している。吉岡の扱った麦生本の本文は書き入れを取っていない本文であると考えられる。伊藤鉄也が「源氏物語『桐壺』の別本諸本の位相」（『大正叢記』創刊号、一九八六年三月）で指摘するように、麦生本文は河内本と密接な関係があるが、校合している本文は青表紙本であった。また阿里莫本が河内本とは異なる別本であることもここで報告されている。

注六 池田利夫「中山家本源氏物語の諸伝本」（『源氏物語の文献学的研究序説』一九八八年、所収）

伊藤鉄也「源氏物語『若紫』の別本」（『国書逸文研究』第五号、一九八一年）

注七 阿部秋生の「別本の本文」（『源氏物語の本文』一九八六年、所収）にこうある。

本文に即して「源氏物語」の現存諸本を分類するならば、青表紙本とは、河内本・別本と対立して、諸本を三分する名称ではなく、別本四類中の第一類、河内本成立以前の古伝本の中をさらに細分する時の名称で、別本第一類、古伝本系別本の中の青表紙本系別本となる。